「三十七の菩薩行」御法話　By ガルチェン・リンポチェ

（2017、4、28－29＠米シアトル）

＝＝

https://www.youtube.com/watch?v=PtJc1C25JZc

上記 URL に御法話の録画が公開されています。以下、録画内の英語通訳をたよりに試訳。

＝＝

[7:06:00～]

■【第二十五偈】

****

菩提を望んで身さえも捨てるなら　外なる諸物は論ずるまでもなし

それゆえいかなる果報も望まずに　布施を与える仏子菩薩行

****

「**菩提**」は、チベット語で「チャン　チュプ」じゃ。
「チャン」は「浄化する」で、
「チュプ」は「マスターする」とか「何かを獲得する」という意味じゃ。
このことは、教えの中でいつもお話ししていることじゃね。

では、私たちは何を浄化したいのじゃろうか？
それは、「苦しみ」じゃ。
苦しみたいか？　苦しみたくはないじゃろう。
それならば、苦しみの因を浄化せねばならん。

では、苦しみの因とは何じゃろうか？
それは、”我”という観念じゃよ。
これが浄化されなければならんのじゃ。
これがさいしょの「チャン」で、「”我”を浄化しなければならない」ということじゃ。

次の「チュプ」は、「何かを得る」という意味じゃが、
あなたは何を得なければならんのじゃろうか？

それは、「利他心」じゃよ。

たとえほんの一瞬でも「利他心」が生じれば、
その瞬間には、”我”という観念はない。
じゃから、あなたが「他者を助け、利益したい」と願うたびに、
苦の因である”我執”をいくらか浄化することになるのじゃ。

じゃから、もし幸せを経験したいのなら、「慈愛の心の因」を育むべきなのじゃ。
「一切有情が　楽と楽因を得んことを」
と言うじゃろ。
幸せになりたいのなら、「慈愛の心の因」を育むべきなのじゃよ。

また、
「一切有情が　苦と苦因を離れんことを」
とも言う。
苦しみから離れたければ、”我執”から離れなければならん。
じつは、慈愛の心さえ持てたなら、
その心のなかでは自ずと「六波羅蜜行」が完成するのじゃ。

そして、この偈は六波羅蜜行のひとつめ、**布施**（generosity）についてじゃ。

ブッダは、六波羅蜜行を完成され**菩提**を得られた。
ブッダの慈愛の心は無量で、一切有情に遍満しておる。
ブッダは一切有情を利益したいと願っておられる。
じゃからブッダは、
「虚空のごとき無量の母なる一切有情・・・」
とおっしゃる。

まず一番さいしょに、ブッダは「利他心」を育まれたのじゃ。
それは「役に立ちたいという願い」（wish to benefit）であり、悟りへの心がまえじゃ。

悟りに至る途中で、
ブッダは三阿僧祇劫という終わりのないような期間に渡って資糧を積集されたのじゃ。
その間に本当に積集されたのは、「慈悲の御心」なのじゃ。
何生にも渡って、ブッダは忍辱をもって「慈悲の御心」を護られたのじゃよ。

そしてさいごに、その果として完全な**菩提**を得られたのじゃ。
それは、「”我執”を完全に断たれた」という意味じゃ。
その果として、「自他不二」（non duality of self and others）を悟られたのじゃよ。

これが、「チャン チュプ」、**菩提**を得るということの意味じゃ。
「チャン」、”我執”が浄化されて、
「チュプ」、何を獲得されたのかというと、「利他心」なのじゃよ。

私たちはここでは**布施**について論じておるが、
布施とは、何であれ自分がとくに執着しているものを「**いかなる果報も望まずに**」与える、ということじゃ。
なぜなら、**布施**を修行するのは、”我執”への対治になるからじゃ。

たとえば、あなたは 100 ドルもっているとする。
するとあなたは「私は 100 ドルを持っている」と認識するじゃろう。
そして、もし 1 ドル手放さなければならないとなると、
「あぁ、私は 1 ドルを手放さなければならない・・」と喪失感をもつじゃろう。

じゃが一方で、もしあなたが何かを得たとすると、100 ドルでは決して十分ではなくなるのじゃ。
何百、何千、何万ドル・・・・と、たくさん得れば得るほど、
実際には心の重荷が重くなっていくのじゃ。

パトゥル・リンポチェは、こうもおっしゃった。

「私は得ることを望まない。
なぜなら、”カルマの負債”をつくって積むことになるから。
むしろ失うほうがいい。
なぜなら、”カルマの負債”を浄化できるからだ。」

じゃから、何かを失くしたり、盗られたり、何かを集めるのでなくて手放すと、
そのたびに心は軽くなり、”我執”が手放され、カルマ（業）の負債が浄化されるのじゃよ。

布施行という意味では、これがブッダが六波羅蜜行のさいしょに説かれたものじゃが、
けっきょくは「慈愛の心」に帰すということじゃ。
六波羅蜜行はすべて、「慈愛の心」のなかに含まれておるものなのじゃ。

たとえば、子の面倒をみる母親というのは、
子どもへの慈愛の心を通じて、じつは自ずと六波羅蜜行を行じていることにもなる。

ただ、その母親の唯一の過失は、それはふつうの感覚なのじゃろうが、
「その子どもを ”我が子” として見て執着している」ということじゃ。
じゃから、彼女の六波羅蜜行というのは不完全で、功徳も半分になるわけじゃが。

じつはこの偈は若干不明確で、
基本的に**布施**修行のためには「持てるものは何であれ手放す」ということなのじゃが、
ここでは**布施**するものとして「**身さえも捨てる**」とまで説かれておる。
帰依するときには三宝に**布施**をするが、実際の物と心で集めたものを**布施**するのじゃ。

「**身さえも捨てる**」とは、
「一切有情を利益するための行いを、実際に自らの身口意をもってする必要がある」
（We need to engage in actions that benefits sentient beings actually with body, speech and mind.）
という意味じゃよ。

[～7:18:18]

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
休憩
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

[7:18:19～]　**OM MANI PADME HUM HRIH**

【注】：
編集時に手違いがあったのか、YouTube 動画内ではこのあとから～第二十九偈までが抜けてしまってます。
以下は、当日手元で録画しておいたものを頼りに試訳しています。

■今朝は**布施**波羅蜜についてお話してきたが、
六つそれぞれの波羅蜜についてさまざまな経典で意味が解説されており、
それぞれにボリュームがある。
じゃが、実際に修行するとなったら、
私たちは「自分はなぜ**布施**修行をするのか？」と尋ねなければならんのじゃよ。

「強欲や貪欲への対治」（as an antidote to avarice or greed）として**布施**修行をするのじゃ。
なぜ貪欲が生じるのか？というと、それは”我執”から生じておる。

布施には三種類あって、先にお話したとおり、
・一つ目は、「物理的なものをできる限りで与える」。
・さもなくば、二つ目は、「法を与える」。
・三つ目は、「恐れからの保護を与える」。
　たとえば病気や貧困・さまざまな敵等、あらゆる恐れからの保護のことじゃな。

これら三つの**布施**のなかで最高なのは、「法を与える」ことじゃ。

布施におけるポイントは、
「何にも執着しない、”我執”から離れた心の状態であること」。
なぜなら、それ（執着？）は 私たちが”我執”や強欲からしてしまうことだからじゃ。
じゃから、それへの対治は、「与えること」であり「与えたいと願うこと」なのじゃ。
与えるものが何であれ、それは**布施**になりうるのじゃよ。

じゃから、あなたがする支払（expense）というのは何であれ、**布施**修行になる。
たとえば医療費等を支払するとき、ふつうは払いたがらずに物惜しみしてしまうが、
たとえ請求書の支払をするときでも
「これは**布施**修行なのだ。受け取る人の役に立つのだ。」
と考えるならば、実際に**布施**修行した功徳を積むことができるのじゃ。

じゃから、**布施**修行のポイントは、
「貪欲や物惜しみから離れること」（To become free from greed or holding back）なのじゃよ。

■たとえ**布施**するものを大して持っていなかったとしても、
「家族の面倒を見る」ということだって**布施**修行になりうるのじゃよ。
たとえば、

子どもの面倒をみるとか、子どもを学校に送っていくとか、子どものための支払いをする等。
“正しく考える”ならば、これら全てが**布施**修行になるのじゃ。

では、どう考えたらいいのかというとな、それは・・・
「自分の子どもの面倒をみているけれど、一切有情が我が子や家族なのだ。
　今生においては、カルマのつながりがあるのでこの家族を直接的には養わなければならない。
　しかしながら、一切有情が私の家族なのだ。」
・・・と。
こう考えることで、支払経費のすべてが**布施**修行になるのじゃよ。

じゃから、彼らを養うときに、心の中で
「一切有情が利益を得んことを。一切有情が菩提を得んことを。」
と願うことじゃ。

次に、「**いかなる果報も望まずに**」と説かれておるが、
何らかの**果報**を求めて**布施**することは、過失となってしまう。

果報への期待というのは、
「いま**布施**しておいたら、来生はお金持ちになれる！」
と願うことじゃ。

じゃが、**いかなる果報も望まずに**　与えるべきなのじゃよ。
なぜなら、もしそういう期待があると、
「今生での恐怖から護られるために」というだけの動機になってしまいかねないからじゃ。
しかし、目的は「**菩提**を得ること」であるべきなのじゃ。

六波羅蜜行の目的は、一切有情にとっての利益を実現すること。
じゃから、「一切有情を利益するために、私は悟りの境地を得たいのだ」と考えたいのじゃ。

もしこの目的（intension）を維持するならば、すべての波羅蜜が自ずと完成する。
その目的を維持できさえすれば、一時的には常に善趣に生まれ変わることができ、
そして究極的には、いつか**菩提**を得ることができるじゃろう。

これが、**布施**修行のエッセンスなのじゃよ。

以上